仏像が表現された金属製装身具

大谷育恵
（奈良文化財研究所）

Ⅰ．はじめに

仏教がいつ、どのような経路をたどって中国に伝来したのかという問題は、大きな関心がよせられてきたテーマの 1 つである。一般的に仏教は前漢末あるいは後漢初頭の紀元前後の頃に西域経由で中原に流入したとされるが、それを裏付ける物質資料が黄河流域においては発見されていない。一方で長江上流の四川省、中下流域の江西、安徽、江蘇、浙江省においては、後漢から両晋期の初期仏教図像が数多く指摘されており、仏教がどのように理解されていたのかという根本的な問題は残るものの、南方経由でのこの地への伝来を推測する根拠となっている。これら初期の仏教図像は「仏教初伝南方ルート」研究班 [賀ほか 1993]、最近では李正暁 [2005] が集成しているが、金属製の装身具がその資料として指摘されたことはない。そこで本稿は仏像表現のある金属製の装身具について諸例を提示したい。

Ⅱ．長江中下流域の出土資料ー指輪

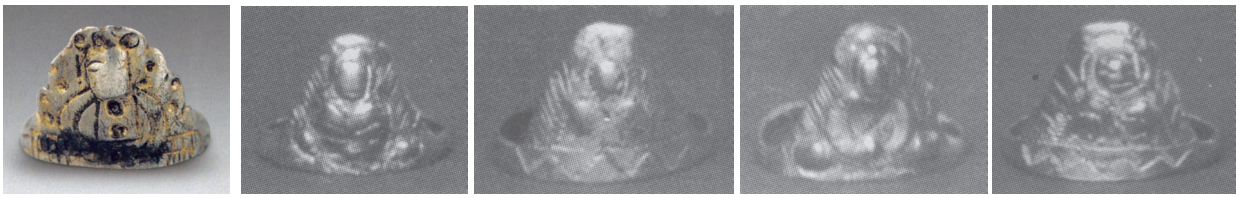
長江中下流域で出土した資料は共に指輪で、2 遺跡で出土している。

盆山 1 号墓　安徽省馬鞍山市卜塘鎮で 2 基の墓が圃場拡張工事中に発見され、破壊を受けたものの 1 号墓は比較的保存状態が良好で、22 点の遺物が出土した [馬鞍山市文物管理所 1990]。同墓では銀製の指輪 4 点が出土し、このうちの 1 点が仏像をモチーフとした指輪である (図 1-1)。盆山 1 号墓の年代は呉末～西晋早期 (3 世紀後半) と推定されている。

南昌火車站 6 号墓　江西省南昌市の南昌火車站では 6 基の磚室墓が発見されている。指輪が出土した 6 号墓は完全に破壊されて破損した木棺のみが残り、棺内では約 20 点の遺物が発見された [江西文物考古研究所・南昌市博物館 2001]。指輪は銀製の指輪 1 点と仏像をモチーフとした金製の指輪 4 点 (図 1-2) である。6 号墓は破壊の度合いが深刻であったためか報告で年代が示されていないが、同墓地 1 ～ 5 号墓の年代は西晋晩期～東晋 (4 世紀初頭～ 5 世紀初頭) の範囲におさまる (3 号墓は紀年墓で、被葬者雷陔（らいがい）は東晋永和 6 年 (352) 卒)。

以上 2 遺跡で出土した仏像をモチーフとした指輪をみると、形状が良く似ており、環の一方の側縁に突出する三角形の装飾部が付く。装飾部には結跏趺坐した人物が表現されている。装飾部の両側縁は波状に段をなし、盆山 1 号墓の指輪の場合には人物から外側に向かって放射状に細かな鏨彫りによる線が入り、光背のような表現になっている。これまで初期の仏教図像がどのような特徴を持つことから仏像として指摘されてきたのか挙げてみると、①肩から生える羽あるいは羽毛、②龍虎座、③蓮華座、④肉髻、⑤白毫、⑥頭光、⑦結跏趺坐、⑧印相、⑨衣紋が代表的な特徴である [1)]。2 遺跡で出土した指輪はこのうち⑦と光背状の表現によって人物像を仏像と認め、初期の仏教図像資料の中に加えて良いものと考える。

そして指輪の形態分類についてもふれておくと、金



1. 盆山 1 号墓　　2. 南昌火車站 6 号墓 (左から M6:2-1, M6:2-2, M6:2-3, M6:2-4)

図 1　指輪

属製の指輪は、①指にはめる環の表面全体を装飾した指輪、②正面ともいうべき中心装飾部のある指輪、の2種類に分けることができる。仏像をモチーフとした指輪の場合は後者の分類に入るが、漢から南北朝期の指輪の中で、環の片側側縁に張り出した装飾部のある指輪は、この2遺跡出土の仏像モチーフの指輪のみである[2)]。

Ⅲ．遼西での出土資料－金璫

仏像をモチーフとした装身具のもう一つの例は、冠につける飾板の金璫（きんとう）である。馮素弗墓出土のこの資料は、1973年の報告時にすでに文様が仏像であると指摘されている。しかし中国への仏教伝播を論じるには時期的に下る時期の資料であり、また遼西での出土例であるためか、仏教図像の研究ではあまり言及されない資料である。

馮素弗墓　遼寧省北票県西官営子で発見された石槨墓で、約470点の遺物が出土した。被葬者は北燕王馮跋の弟馮素弗であると、出土した4点の印の官爵と『晋書』中の記載とが一致することにより推定されている。同書の記載によると、馮素弗の没年は太平7年(415)である[黎1973]。

この墓からは、金製冠飾と共に「圧印人物紋山形金飾」1点、「鏤孔山形金飾片」2点が出土した。後者は蝉をモチーフとした金璫で、前者がここで問題とする仏像をモチーフとした金璫にあたる。金璫は山字形を呈し、文様を圧し出した金板に、さらに金線を通して円形金片(瓔珞)を連続して綴って装飾している。金璫に押し出しされた文様は一仏二脇侍像と報告されている。背面から見ると中央の結跏趺坐し火炎文光背をもつ人物の図像は明瞭であるが、右側は人物のようにも見えるが左側は識別できず、実際には両脇の文様が人物であるかどうかは判別できない(図2)。

金璫については以前集成と編年を試みたことがあり[3)]、馮素弗墓の金璫はいずれも装飾手法にみられる特徴から遼西で製作されたものと考えた[大谷2011]。遼西において金璫の文様が仏像に置き換わったものと考えられる。

Ⅳ．おわりに

本稿では金属で製作された装身具のうち、仏像表現のある2種類の装身具を提示した。

図2　金璫

長江中下流域の指輪については、これまでにも集成されてきた中国における初期の仏教図像の例に追加できる資料である。遼西の馮素弗墓出土の金璫については、南伝とその伝来時期の問題では対象資料とならないが、この資料は吉林省集安県の長川1号墓(4世紀中葉から5世紀中葉)の正面藻井壁画と共に、中国東北部における初期の仏像図資料であり、この地へ伝来した仏教の経路について、図像資料の点から淵源関係を考えるうえで重要な資料である。

註

1) このうち①と②は神仙図像との関係が問題となる特徴でもある。

2) 片側側縁に突出する装飾部を持つ形態の指輪は、慶州市の皇南大塚南墳に5点の瓔珞装飾付銀製指輪がある。ただし両者の間には関係性はないであろう。

3) 前著[大谷2011:91, 93]で馮素弗墓出土の仏像をモチーフとした金璫を独立して設定しておらず、外形の最も近い騎龍羽人金璫と共に記載している点は訂正したい。

引用・参考文献

黎瑶渤 1973「遼寧北票県西官営子北燕馮素弗墓」『文物』1973-3: 2-28.

賀雲翱・阮栄春・劉俊文・山田明爾・木田知生・入澤崇編

1993『仏教初伝南方之路文物図録』文物出版社 .
遼寧省文物考古研究所編 2002『三燕文物精粋』遼寧人民出版社 (『三燕文物精粋 (日本語版)』2004).
馬鞍山市文物管理所 1990「馬鞍山市盆山発現六朝墓」『文物研究』総 6 期 (再録 : 王俊主編 2008『馬鞍山六朝墓葬発掘與研究』科学出版社 : 80-83).
慶州文化財研究所編 1993『皇南大塚Ⅱ (南墳) 発掘調査報告書』文化財管理局 文化財研究所 .
江西省文物考古研究所・南昌市博物館 2001「南昌火車站東晋墓葬群発掘簡報」『文物』2001-2:
劉建華 2001「第 5 章 従万仏堂石窟看龍城地区的佛教発展」『義県万仏堂石窟」科学出版社 .
李正暁 2005「中国内地秦漢時期佛教図像考析」『考古学報』2005-4: 411-447.
大谷育恵 2011「三燕金属製装身具の研究」『金沢大学考古学紀要』32 金沢大学人文学類考古学研究室 : 87-105.

図版出典

図 1　1. 王俊主編 2008 彩版 1-6　2. 江西省文物考古研究所・南昌市博物館 2001 p.34 図 78
図 2　上 : 遼寧省文物考古研究所編 2002 図版 8　下 : 黎瑶渤 1973 p.9 図 14